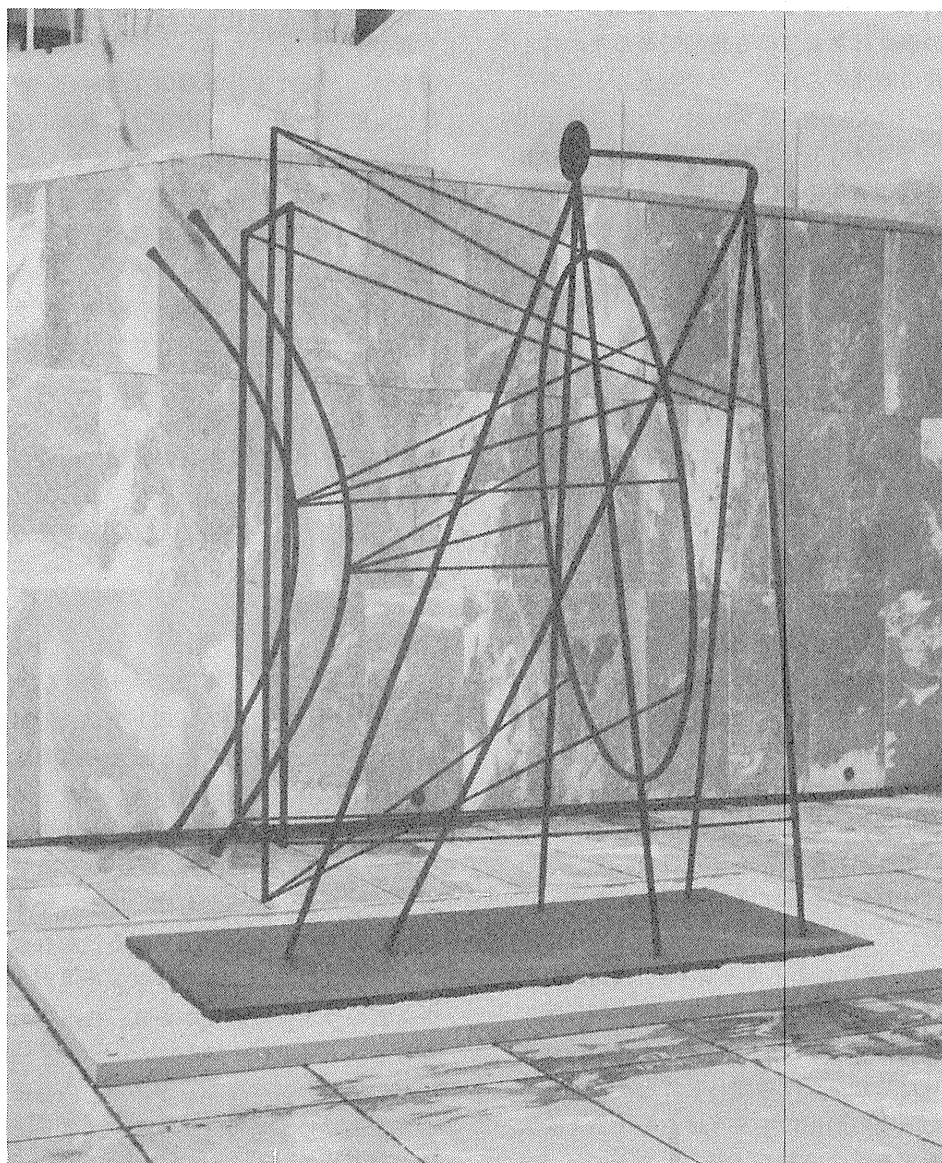


北里大学教養図書館

閲覧ニュース

40号

1983. 6



プラトンの生涯と著作

—プラトン全集を読む学生諸君のために—

山 根 和 平

西洋世界でプラトンほど大きな影響をあたえた人は、一人もないと言ってよいだろう。かれの個性はあまりにも強烈であるために、2000年の時間をこえて、今でも至るところに生きつづけている。その力は、たんに哲学思想の上だけでなく、文学、芸術、宗教、政治、法律等西洋文化のあらゆる面に浸透していると言っても、あながち言いすぎではなかろう。哲学の場合だけに限ってみても、西洋哲学史とは、要するにプラトンの著作に対する註釈にすぎないと考える人々は二三にとどまらない。文学を例にとれば、十九世紀フランスのロマン派の作家で、象徴主義の先駆者とされているネルヴェルの夢（『オーレリア』）の中にも、プラトンが描いた魂の神話の影が認められるのである。しかし、プラトンは詩人の夢の中にのみ生きているわけではない。さらにいくつかの例をあげてみよう。「それが理想国へ与える有効さと美しさについては……これをプラトンが十分に考察している」（コペルニクス、『天体の回転について』、第Ⅰ巻序説、矢島祐利訳による）。「またプラトンその人も人間の知性を讃嘆し、これが数の本性を理解するというだけで神的なことがらの分け前にあずかっているものとみなしたということとはぼくもきわめてよく知っています。ぼくもそれについては大体プラトンと同様に考えます」（ガリレオ・ガリレイ、『天文対話』、第1日、サルヴィアチの言葉、青木靖三訳による）。「プラトンが大賢ソクラテスの時代に生まれたことを天に感謝したごとく、わたしもまた清明の治世に生をうけた……ことを天に感謝するものである」（モンテスキュー、『法の精神』、序文、根岸国孝訳による）。「プラトンはその著作『政治家』において、自分の

求める市民あるいは王者とは何かを定義するのに、カリグラ帝が事実について行なったのと同じ推論を権利について行なった」（ジャン=ジャック・ルソー、『社会契約論』、第2編、第7章、井上幸治訳による）。

読者は、以上の引用文を見て、筆者がわざわざプラトンに関係のある著作を選んだのだと思われるかもしれない。しかし、それは、とんでもない見当ちがいのものである。筆者は、たまたま、本棚のなかから、青春時代に乱読したあげく、内容など完全に忘れてしまっていた数冊の本を、手あたり次第に引っぱりだしただけである。筆者の意図は、プラトン哲学の影が、これらの著作にも反映されているかどうか、確かめようというものであった。プラトンの影どころか、プラトン自身の名前が、勝手に取りだした著作のすべてに現われてこようとは、まったく思いがけないことであった。筆者は、あらためて、西洋文化におけるプラトンの影響力の強さを認識させられたのである。それでは、プラトンというのは、いったいどんな人物であったのだろうか。

1

プラトンは、前427年にアテーナイ（アテネ）で生まれた。父親のアリストンは、前11世紀にアテーナイを支配したと伝えられるコドロス王の子孫であり、母親のペリクティオネもまた、七賢人のひとりアテーナイの法律を作成したと伝えられるソロンの末裔であった。すなわち、両親ともに、アテーナイの由緒正しい高貴な家柄の出である。かれは、この両親の三男坊で、グラウコンとアディマントスというふたりの兄がおり、さらにもうひとりポトネーという姉がいた。ポトネーの息子が哲学者のスペウシポスで、のちにプラトンが創立した学校（アカデメイア）の第2代学頭となる。

プラトンの本名はアリストクレスであって「プラトン」（幅の広い）というのはあだ名

である。このあだ名の由来については、かれの肩幅が広がったので、体育の先生が「プラトン」と言ったのが通称になったという説もあり、あるいは、かれのひたいが広がったためだと言う説もある。

プラトンの誕生は、アテーナイの没落の時期に当たっている。前431年に始まったペロポネソス戦争は、アテーナイの敗北に終り、その覇権も栄光も地におちてしまった。18歳のプラトンも、一兵士として、この戦争に参加したのである(前409年)が、その経験はプラトンの思想に重大な影響をあたえたとは思われない。むしろ、青年期のプラトンは、アテーナイの名家の子弟にふさわしい教育を受け、数学、音楽、詩作、体育等の学習にほとんど専念していたと言ってよいであろう。

プラトンはホメロスを読んでから、自作の詩を火中に投じたとされるが、それにもかかわらず、プラトンの真作とされる詩が若干伝えられている。

これはその昔 アイガイアの波の
重いとどろきを棄てて、
エクバタナの 曠野のさなかに
ねむるわれら。
さらば、世に聞えた そのかみの故国
エレクトリア、
さらばよ エウボイアの
隣人なる アテーナイ
なつかしい海よ、さらば。
(「ペルシアに虜はれしエレクトリア人を」
という題辞のある悼詩。呉茂一訳による)

このほかにも、プラトンの作とされる献詩や恋愛詩もある。しかし、プラトンは詩作にのみ専念していたわけではない。青年期のプラトンは、ヘラクレイトスの学派に属するクラテュロスから哲学の手ほどきを授けられたが、哲学もまた若きプラトンにとって、それほど重要なものとは思われなかった。かれにとって最も関心のある問題は、政治であった。

前404年、ペロポネソス戦争がアテーナイの敗北に終ると、「30人僭主」が支配する時代となり、恐怖政治が行なわれたが、プラトンの母方の叔父カルミデスと、母の従兄クリティアスは、この30人のなかに入っている。プラトンは、この二人に対しては、あまり好感を抱いていなかったようであるが、かれの政治に対する志向は、依然として変らなかった。

プラトンが哲学者を志向するようになる決定的な動機は、前399年にソクラテスが死刑に処せられた事件である。これより以前から、プラトンは、上述のクリティアス等の紹介で、ソクラテスのグループに入り、影響を受けていた。しかし、そのソクラテスが、友人たちと語り合いながら、毒杯を仰ぎ、従容として死についたことは、20代の終りに近づいていたプラトンにとって、たいへんな衝撃をあたえたように思われる。ソクラテスの臨終を描く対話篇『パイドン』は、「これが……ぼくたちの友、ぼくたちが知るかぎりでは同時代の人々のなかで最もすぐれた、しかも最も賢い、最も正しいと言うべき人のご最期なのでした」(池田美恵訳による)という悲痛な言葉で終っている。こうした文面からも、ソクラテスの死がプラトンにあたえた影響の大きさをかいま見ることができよう。

これよりさき、前403年に「30人僭主制」は廃止され、アテーナイには再び民主制が復活するきざしが見え始める。プラトンは、30人僭主のなかにも、一族のカルミデスやクリティアスがいたせいか、あるいは、処刑されたソクラテスのグループに属していたからか、ともかく、他のソクラテス派の人たちと共に、アテーナイから逃亡し、メガラに避難した。メガラでは、ソクラテス門下のエウクレイデス(メガラ派の祖)に迎えられたが、ここでは長期の逗留はせず、まもなく、クレタ、エジプト、キュレネ等の各地をめぐる大旅行に出かけ、前396年ごろにはアテーナイにもどっている。このごろに書かれたと推定

される対話篇には、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『ラケス』、『ゴルギアス』、『メノン』、『クラテュロス』等があり、『国家』第1部も、この時代に書き始められたようだが、この時期の対話篇には、ソクラテスの影響が強く、その思想をある程度忠実に反映しているものと見られている。

2

プラトンは、前390年より少しのちに、メガレー・ヘルラス（マグナ・グラエキア）と呼ばれていたイタリア半島南部地方を訪れた。この旅行がプラトン哲学に与えた影響はきわめて大きかった。第一に、この旅行中、プラトンは、同地方のピタゴラス派の研究センターと接触し、とりわけ、タラス（タレントゥム）のアルキュタスと親交を結んだ。これ以後、晩年になればなるほど、プラトン哲学にはピタゴラス主義の色合いが強まるようになる。第二に、プラトンは、メガレー・ヘルラスから、シケリア（シチリア）島にわたり、ディオンの知り合った。ディオンは、同島のシュラクサイ（シラクサ）という都市を支配していた僭主ディオニュシオス1世の義弟で、プラトンがいただいていた理想国の考えに共鳴し、ぜひともシュラクサイにおいて、その理想を実現したいと望んだのである。

しかし、プラトンの理想は、シケリア島をめぐる政治の現実とあまりにもかけはなれていたために、ディオンの意図は挫折してしまった。ディオニュシオス1世の宮廷にとどまっていたプラトンは、アテーナイに帰ることを望んだ。ディオニュシオス1世は、おもてむきは帰国を許したが、かげでは、ひそかにスパルタの大使ポリスに命令を下していた。プラトンはポリスの船でアテーナイにもどろうとしていたのであるが、ディオニュシオス1世はポリスに、この船をアテーナイに行かせずに、当時アテーナイと交戦していたアイギナに行かせ、プラトンを下船させて、奴隷として売りに出すように命じたのであ

る。この命令は実行され、プラトンはアイギナで奴隷にされてしまった。

けれども、さいわいなことに、プラトンの知り合いにアンニケリスという人がいて、たまたま奴隷になったプラトンのことを聞き、大金を支払って買いもどしてくれた。こうして、プラトンは、ようやく自由の身となってアテーナイに帰りついたのである（前387年夏）。プラトンはアンニケリスに感謝し、奴隷の買いもどしに要した金額を返そうと申し出たが、アンニケリスは固辞して受けとらなかった。そこで、プラトンは、その金でアテーナイ市の郊外に土地を買って、学校をつくることにしたのである。

その場所は、同市の中心部を取りまいてる城壁の外で、アクロポリスから見て、北西の方角にあった。ここには、古くからギリシア神話の英雄アカデモスをまつる神殿があった。そのために、学校はアカデメイアと名づけられた。以後20年のあいだ、プラトンは、この学校で教育と著作に専念することになる。『饗宴』、『パイドン』、『国家』第Ⅱ部以下の全巻、『パイドロス』、『テアイテトス』、『パルメニデス』のような重要な対話篇が、この時期に成立する。

しかし、プラトンは理想国の実現をあきらめたわけではなかった。ディオンはまた、プラトンに対する友情を失ってはいなかった。前367年にディオニュシオスⅠ世が没して、同Ⅱ世が即位すると、ディオンは、理想国建設のために、シュラクサイを訪れるように懇請した。プラトンは、前366年と361年の2回にわたり、シュラクサイを訪問するが、結局ディオニュシオスⅡ世もまた、ディオンのプラトンの構想を理解できず、理想国の建設計画は挫折してしまう。シュラクサイの宮廷にいたプラトンは、2度とも生命の危険を感じるようになり、いずれの場合も、かろうじてシケリア島を脱出して帰国するようなありさまであった。

一方、ディオンは、プラトンの学園の人た

ちに助けられて、ついにディオニュシオスⅡ世に対して反乱をおこし（前357年）、シュラクサイを占領して、哲学者の政治が実現するかと思われた。ところが、ささいな行きちがいから、プラトンの弟子であるカリッポスがディオンを殺害し、理想国の建設は、またもや挫折してしまったのである。これ以後、プラトンは、アテナイを出ることなく、アカデメイアでの教育と著作に専念することになる。この話は、あたかも孔子が道德国家の理想をいだいて、諸国を歴訪しながら、どこの国の君主にも理解されず、故国に帰って子弟の教育に専念したという故事を思い出させるようなところがある。しかし、プラトンの著作活動はおとろえることなく、『ソピステス』、『ポリティコス』、『ピレボス』、『ティマイオス』、『クリティアス』、『法律』等の対話篇が書きつづけられていった。古くからの言いつたえによれば、プラトンは、「著書を書きながら死去した」と言われる（キケロの証言）。『法律』が未完のままになっているのは、おそらく、そのためであろう。時に前347年であった。死去の日は、奇しくもプラトンの誕生日でもあったと言われている。遺体はアカデメイアの庭園に埋葬された。

3

プラトンの著作は、特殊なものを除いては、ほとんどが対話の形式で書かれており、文章は、ギリシアの散文を代表する名文である。ただし、青年期の著作と晩年の著作では、文体や用語の上で、かなりの相違があり、思想内容の相違と合わせて、プラトンの著作を年代順に配列することが可能となったのである。こうした対話篇は、古代世界では、かなり流布していたようであり、それを分類整理する作業も、ビュザンティオンのアリストパネスやメンデスのトラシユロスによって行われている。しかし、西ローマ帝国の滅亡後は、これらの著作は西洋世界では、ほとんど散逸してしまった。こうして、西洋中世は、『ティ

マイオス』その他わずかの著作を除いては、プラトンの著作をまったく知らず、原典にもとづく研究も行なわれなかった。

これに対して、東ローマ帝国やイスラム諸国では、プラトンの原典が大切に保存され、多くの註釈書や解説書が刊行されている。西洋世界がプラトンの著作の全体を知るようになるのは、ようやく15世紀になってからのことである。1578年にステファヌスが刊行した『プラトン全集』（*Platonis opera quae extant omnia*）は、この種の全集の基礎となるものであり、現在世界各国で刊行されている『プラトン全集』は、何らかの形で、このステファヌス版に依拠している。したがって、プラトンの文章を引用する場合には、ステファヌス版のページ数と、各ページのなかの段落を示すAからEまでの記号を付記することが通例となっている。

教養図書館には、岩波書店版の『プラトン全集』が所蔵されている（131.3/P 71c/1-15, Sup）が、これは、現在わが国で入手し得る日本語版の『プラトン全集』のなかでも最良のものであろう。アメリカの大学などでは、大学の新入生に対して、まずプラトンを読ませるところもあるというが、プラトンがいだいていた真理に対する激しいあこがれの念は、今でも、これから大学で学ぼうとする人たちにとって、大きな刺激となり、支えともなるからであろう。その意味で、学生諸君にも上記の全集を、ぜひ手にとって読んでもらいたいと思う。最後に一言つけ加えると、『国家』や『法律』のように大部の対話篇よりも、むしろ、『リュシス』（友情論）、『饗宴』（愛について）、『パイドン』（生と死について）のような、比較的小さい対話篇から読みはじめるほうがよいと思う。そのなかには必ず諸君の心に深い印象をあたえる言葉があり、また、学問とはどのようなものかを示す論議が見られると思うからである。

（哲学）

アルハンブラの想い出

横山 寧夫

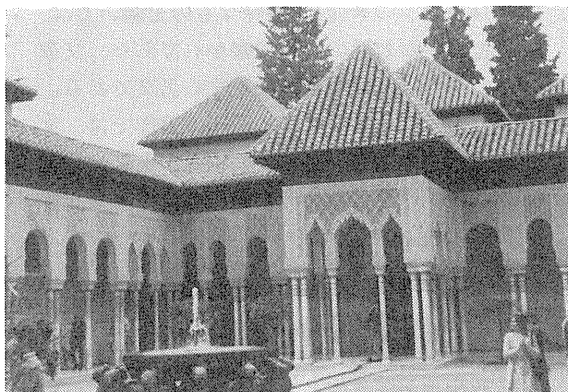
タレルガの同名の曲やワシントン・アービングの『アルハンブラ物語』を生んだ名高いこの「赤い城」をかねがね一度は訪れたいと思っていた。だから六月のある日、スペインのあまり面白くない首都マドリッドをあとに汽車がアンダルシア地方の平原を横切り、ひたすらグラナダに向って走っているとき、私の期待も昂ぶっていた。車中では私と同席していた、やはり観光の初老のイギリス婦人は、私がサバティカルイヤー(研究休暇年)をとって旅行しているのを知るときかんに話しかけてくる。以前スイスの車中で同席したロンドンの写真家と称する男はサバティカルイヤーの意味が分らなかった。私が大英博物館の自然科学部門を賞めたら、彼はまだ見たこともないという。そうゆうものかもしれない。窓外にはアンダルシアの人気ない広漠とした丘陵が延々とつづく。スペインの半分も横断しているのに人影が全くないのには恐れ入る。わが国の新幹線の沿線をふと思い出した。

終着駅のグラナダに到着。残念ながら私はスペイン語が全く話せない。例によって気儘な一人旅で宿の予約も何もしていないから、ホテルはこれから自分で探さねばならない。しかし半年以上ヨーロッパをうろついた経験から何とか中級のホテルに落ち着く。人なつこいボーイと身ぶり手ぶりで話し、チップをはずむとこの少年は嬉しそうに顔をほころばせた。この国の物価は非常に安く、貧富の差ははげしい。

一週間ほどの滞在を予定し、次の日は一應市中の観光バスに乗る。案内人のスペイン語の説明を、隣りに坐っていたアメリカの大学生が私に英語で翻訳してくれる。この学生は私と同宿で、夜にはもう一人の友人を連れて私の部屋に遊びにきた。話題は政治やベトナム

戦争にまで及び、私がアメリカの政策を非難すると素直に全くその通りだといった。しかしグラナダの夜は政治よりも音楽の話の方が楽しい。その学生は故郷の教会でパイプオルガンを弾いているという。やや似た経験をもっていた私は演奏法の話に夢中になった。

アルハンブラ宮殿はグラナダの町にあり、東西建築の不思議な融合を示した名閣である。ヨーロッパ各地にみられる大理石や金銀でかためられた寺院や宮殿を見馴れた眼には、土色の壁はたよりなく、そこに彫刻されたモザイク調の装飾は苛だたしいほど精巧で、それはおよそ雄大豪壮という印象からは遠いものであるが、緑に包まれたその柔かなオリエント調の庭園や、月明りの中にみるこの宮殿の名状しがたい魔力は世界の観光客をあつめるにふさわしい格調の高さをもっている。人工と自然の美が渾然と融け合い、絢爛さの中に哀切を秘め、瞑目すれば颯々たる南欧の響きが耳朶をかすめる。アーチをくぐり、木立の小徑を登り、アラビア風の回廊に囲まれた《アラヤネスの中庭》に出る。清冽な水をたたえた池と噴水、華麗なアラベスク模様の広間など一つ一つが数百年の歴史の盛衰を感じさせ、それぞれにいわくあり気な名称がつけられているのだが、今はそれらを思い出せない。東洋にはちがいないけれども、日本

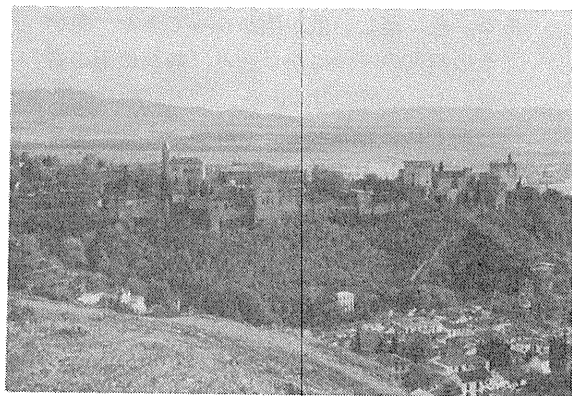


アラヤネスの中庭、中央の噴水の台座の周囲の12頭のライオンが口から水を吹いて時刻を知らせる。たとえば3時なら、3頭のライオンが水を吹く。

の文化とは全く異質なイスラム文化を、西洋の西端でみつけたのは興味深かった。それにつけても一般の日本人の眼が、東南、中近東のアジアをとびこえて、いきなりヨーロッパやアメリカの文化と結びついていることは考えさせられる。

ここで歴史的蛇足をつけ加えておこう。西暦七世紀にイスラム教徒がエジプトを通して北アフリカに侵入した結果、形も文化もアラブ化した混血のムーア人が生れた。かれらは南から対岸のアンダルシア地方を襲い、そこにムーア王国の砦としてアルハンブラを築き、この世の楽園のような国家をつくることを夢みた。一時はこの砦に四万人の兵士が駐留していたという。しかし後にこの地がキリスト教徒の手に落ちてから、彼等は放逐され、この城塞はスペインの王室によって維持されるようになった。十四世紀にカルロス五世はこの中にムーア人にまさる豪壮な宮殿を建築しようともくろみ、その主要部分は作られたが完成に到らなかった。月日が経つにつれてこの城は王室の別荘からはなれ、美しい宮殿も次第に荒廃していった。われわれが現在のような姿でみられるのは、近代のスペイン戦争で勝利をえたフランスの司令官が廃墟となったこの宮殿をムーア風に修復し、崩壊から救ったからだといわれている。

アルハンブラの魅力は私の文才ではとうてい表現できないようだ。アービングが感嘆するように、ここで触れる独特の美のすばらしさ、これより壮麗で完璧な芸術の感動の求められるものは稀であろう。これは気品高く繊細で、幻想的な優雅さを漂わせ、人々を物憂い快樂の世界に誘いこむ。「月光を浴びるアルハンブラ」の項でアービングは次のように云う。「……夏の夜、アンダルシアに吹く微風の好ましさと月の優しさ、その魅力を想像できようか。アルハンブラでは流れていく《時》の亀裂というものと、あらゆる物体が朽ちていく色合いといったものを眼で見ることができる。……月光を浴びた列柱の奥



サクロモンテの丘から望見するアルハンブラ宮殿。グラナダの町は宮殿のある丘の背後、シエラ・ネバダは向って左やや後方にある。

まった広間は絹布のような光沢をおび、この宮殿はアラビアンナイトに出てくる魔法の城を想い起させる。……夜空の下で右手にシエラ・ネバダの雪山が銀の雲のように浮び、……南国のこちよい空気を思う存分吸いながら、私はひそかに夢想し、感動し、現実ばなれしたくらしの中で、時がたつのを忘れてしまうのだ。」文学的な誇張もあるだろうが、その情緒は夢想する人の心の中で無限に拡がってゆく。私はこの情緒をタレルガが僅か二つの短いメロディーの中に適確に表現していることに驚く。私はギターが弾けないので、この名曲を自分でピアノに編曲して楽しんでいるのだが、この短い章節に盛られているのはまさに私が何度もここを訪れたときに聴いた爛々たるロマンのささやきであった。

一日、私はアルハンブラ宮殿が一望にみえる反対側の高台に登ってみた。ここはうす汚ない無細工な白壁の作りがその貧しさを語っているグラナダの細民街を抜けたところであるが—あの華やかなフラメンコを踊る女たちの多くがこの出身なのだろうか—教会らしい建物の周辺の荒地には、内部を白い漆喰で固められた無数の洞穴がある。あとで知ったことなのだが、むかしジプシーたちがグラナダの町中に入ることを許されなかったためにこのような穴居生活を強いられたのだそうで

ある。急に美しい俄か雨がふってきた。急いでその洞穴の一つにかけ込み、静かに雨の音を聴いた。やがて雨は止み、大空に雲は流れ、何と前方に私の見たこともないような見事な虹がかかった！ 虹の中に夢のように浮ぶアルハンブラ。この感動を経験した観光客は少ないであろう。カメラを置いてきたのでこれをお見せできないのがまことに残念である。

グラナダを去る日、前述のアービングは、「たしかにアルハンブラで過ごした日々は、私にとって最も幸せな夢をみていたときであった。そしてアルハンブラへの別れは、私の幸せな夢への訣別でもあった」という言葉でその書物を結んでいる。それから百年以上過ぎて現在の現在、一介の旅行者の私は、彼ほどの感銘はうけなかったかも知れぬが、あちこちと廻り歩いたヨーロッパ紀行の忘れがたい思い出の一つであることにはちがいない。どこの観光地とも同じように、アービングのいた時代とちがってすべてが商業化してしまった。六ヶ国語を自由に操るアルハンブラの観光ガイドの説明もスペイン店も型通りであり、附近には子供や老婆が寄ってきて盛んに小銭をねだっていた。アリカンテに向う汽車の中で同席したグラナダの若い学校教師は、おそろしく下手な英語でスペインの貧富の格差について話していた。話はすべて現実的な、余りに現実的なものばかりであった。
(社会学)

前期試験に備えて

7月2日、9日の両土曜日は3時まで開館時間を延長します。

表紙：モニュメント（ピカソ作。ニューヨーク近代美術館）。1928年に彼が作った詩人ギヨーム・アポリネールの記念碑の原型（高さ50.5cm）を1972年に彼自身が監督して高さ395.3cmに拡大したもの。ピカソからニューヨーク近代美術館に寄贈された。

夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の閉館、貸出等は下記のとおりです。

1) 長期貸出

貸出期間 7月15日(金)～9月19日(月)

貸出冊数 1人5冊まで

(但し雑誌は対象外です)

2) 開館時間

7月18日(月)～30日(土)、9月1日(木)～14日(水)

平日 9時から5時まで

土曜日 9時から1時まで

8月

平日 9時から3時まで

土曜日 9時から1時まで

3) 閉館

8月8日(月)～8月13日(土)

— 編集後記 —

6月も終りに近付き新入生の皆さんも学生生活に慣れたよう見受けます。今回40号は、哲学の山根先生にプラトン全集紹介を、社会学の横山先生にスペイン旅行の思い出をお書き頂きました。横山先生には『社会学概論』慶應通信 1981 (361/Y79a)等のご著作がお有りです。今回は社会学にとらわれずに御執筆をお願いした所、夏休み前にふさわしく、興味深い旅行記を頂戴することができました。

『閲覧ニュース』が小伝を企画し、山根先生に御執筆頂くことにしたのは28号からですが、先生の御病気で暫く中断しておりましたところ、今回久し振りに原稿を頂くことができました。御快癒を心からお喜び申し上げ、シリーズ再開のアナウンスに代えます。

閲覧ニュース40号	1983・6発行	北里大学教養図書館
発行責任者 小野健一	〒228	相模原市北里1-15-1